

木のイメージの変遷に見るアナロジーの展開  
-古代神話より中世キリスト教に至るまで-

山田 仁子

On Analogies to Tree  
- Growing Image of Tree from Myths to Christianity -

Hitoko YAMADA

**Abstract**

Analogy plays an important role in human thought. When confronted with an unfamiliar things or situations, we often start to look for things that are familiar or similar in some way and build a structure of analogy between those things. Successful analogy brings understanding.

From ancient times, people have used trees as a base for analogies. This study investigates analogies to tree from ancient myths to the middle ages of the Christian era. Some general features of the mechanism of analogy creation are also explored.

## 序

人間の思考においてはアナロジー（類比）が重要な役割を果たす。人は未知の物や状況を理解し考察するのに、何かしらより親しみのある、よく見知った物や状況を拠り所として頼らざるを得ない。例えば、Holyoak & Thagard は、ある一人の子供が鳥の生態を人間の生活様式に置き換える様子を、アナロジー思考の一例として示す。子供は木に止まる鳥を見て、まずは「木」を鳥にとっての「椅子」だと思いつくが、母親が鳥の「巣」を人間にとっての「家」だと言うのを聞いて、「木」を鳥にとっての「裏庭」だと考え直す。<sup>1</sup>子供は自分の知らない鳥の世界の構造を、自分がよく知っている人間の世界の構造に対応させ、またその対応関係を、より良いものに変えていこうとしている。子供はそれまで未知であったものを、よく知っているものに結びつけ、更にはよい対応関係を成すアナロジー構造を作り出すことにより、初めて「理解」と満足するのである。

このようなアナロジー思考は子供に限らず、大人も無意識に日常的に行っている。日常言語にはアナロジー思考の結果生まれた表現が数多く含まれている。「時」は「空間」へと類比される。「空間」について人は、回りの物を目で見て大地を足裏で踏むことで、今確かに存在する場としてよく知っている。全身の感覚を通じてどういうものなのかを実感して分かっている。人はこの自分がよく知る「空間」に結びつけることで、捉えどころのない「時」を「理解」できるものに変えるのである。

この「時」から「空間」へのアナロジー思考は、逆方向の思考の流れも引き起こす。「時」がいったん「空間」へと結びつけられると、次に「空間」の概念構造が「時」にあてはめられ、「時」の概念構造を作り出す。「空間」の概念構造が「時」という概念に投影されることで、本来「空間」の領域において用いられる語彙が、「時」をも表す語彙に変化する。「前の日」「数年の後」「長い時間」「短い時間」「9時から5時まで」などの表現に含まれる、「前」「後」「長い」「短い」「から」「まで」といった語彙はその例である。アナロジー思考はこのように、双方向性を持ち、2つの概念の間を行ったり来たりして進行する。

「時」以外の抽象的な概念、理解し難い事象も、具体性を持ち人がよく親しみ知っている事物・事象へのアナロジーによって、実感を持って「理解」され、

---

<sup>1</sup> Holyoak & Thagard, p. 2 参照

概念として成立しているのだが、アナロジーに用いられる具体性ある事物の中でも、とくに昔から繰り返し用いられてきたものがある。それは古代より人間が身近に親しんできた「木」である。「木」という存在は古代より現代に至るまで、実に多くの重要な場面で、分野で、抽象的な思考を助け、ひいては文明の発展にまで寄与してきた。世界各地に残る多くの古代神話において、「木」は生命や宇宙の真理を示し、中世・近世の学問においてはイエス・キリストの系統を示し、知識の体系を示し、19世紀には生物の進化を表すものとなった。現代においては生物学をはじめとする科学はもちろんのこと、数学、言語学、哲学と様々な学問分野において、また日常生活においても、「木」のイメージが頻繁に利用されている。

本研究では、「木」というものが古代よりどのようなイメージで捉えられ何を表してきたのか、その変遷を追いながら分析する。「木」のイメージの豊かさや有効性が明らかになり、またアナロジー一般について、その展開の興味深い性質も示されることになるだろう。今回本稿では、特に古代から中世にかけて、神話やキリスト教の世界で表されてきた「木」が示すアナロジーについて考察する。

## 1. 神話における「木」

はじめに、古代における「木」のイメージを用いたアナロジーについて考察する。世界各地に残る多くの神話には、「木」が「生命の木」や「宇宙樹」として登場し、重要な役割を果たしている。「生命の木」や「宇宙樹」という発想は、「生命」や「宇宙」から「木」へのアナロジー思考を示している。古代の人間は「生命」や「宇宙」の成り立ちがどういったものかという抽象的な思考を行うにあたり、「生命」や「宇宙」を、「木」という具体的でよく知ったもののイメージにアナログカルに結びつけて理解しようとし、また抽象的で捉えにくい「生命」や「宇宙」を「木」の形を借りて表現したのである。

### 1-1. 古代の「生命の木」

「生命」は、その凝縮した姿を表す物として、また、人間が望んでも決して得ることのない理想の生命のありかたを表す物として、「木」が選ばれた。ブ罗斯は「樹液」が人間の「血液」に、冬に葉の落ちた樹木が「骸骨」に似ることから、落葉樹が「連続する死と再生のサイクルを象徴」(p. 46)すると言う。

人間の生きて立つ姿は、大地にまっすぐに立つ「木」の姿になぞらえられる。「血液」は「樹液」のようだ。また「人間の一生」は「落葉樹の一年」に、ア

ナロジカルに対応する。つまり、春の樹木の息吹は人間の誕生に、夏の青々と葉を茂らせた姿は人間の青年期、壮年期に、そして、冬の枯れ木然とした姿は人間の老年、そして死にぴったりと対応するのである。人間の「生命」は、このアナロジーにより、落葉樹の一年のサイクルに凝縮されることになる。しかし、次の春に、枯れ木同然の落葉樹からまた新芽が吹き出す点に対応する所は、人間の一生には見当たらない。完璧だったアナロジーにはほころびが生じることとなる。このほころび、美しく対応していたはずのアナロジーにおける一つのズレは、人間と落葉樹の違いを際立たせる。こうして人間の叶わぬ夢である「再生」と「永遠」の命が示されることになる。

常緑樹は、落葉樹の場合より単純なアナロジーにより、「永遠」の生命を表すと考えられる。常緑樹の場合、人間の立つ姿、血液、血液の循環に対する、木の屹立する姿、樹液、樹液の循環といった、落葉樹の場合にも見られた対応関係により、人間の生命から常緑樹の生命へとアナロジカルに結びつけられるが、人間の「一生」から常緑樹へと対応する点を探しても、落葉樹の一年のような短い期間で対応する物はない。常緑樹は年中青々と葉を茂らせている。人間の死に対応する時点はなかなか常緑樹には訪れない。ここにアナロジーにおけるズレが生じ、人間と常緑樹の違いが際立たされ、「永遠」の生命が表現されることになる。

下図(1)に示すメソポタミア文明における「生命の木」は、常緑樹であることから「永遠」の生命を表す。ただしこの木の場合は、後から述べる理由により、「再生」も表現し、さらにこの「再生」からも二重に「永遠」性を表す。

(1)



(フレイザー『図説』, p.96)

図(1)に描かれるのはナツメヤシの変形したものと考えられるが、ブ羅斯はシュメールの時代以来、ナツメヤシが「生命の木」のイメージの起源となっているとし、その大きな要因として、ナツメヤシの「豊穡さ」、「不死鳥」になぞらえられるほどの「再生能力」を挙げている。(pp.230-233) この図(1)では中心の大きなナツメヤシのまわりに小さなナツメヤシが数多く取り囲んでいるが、これはナツメヤシの、挿し芽によって無数に殖える性質を強調して描いていると考えられる。この増殖の描写は、「再生」する「生命」を表している。また、再生することは決して死ぬことがないということの意味するため、「不死」という「永遠」も表すことになる。

ナツメヤシを元にした「生命の木」で起きているアナロジーについて分析すると、次のようになるだろう。まず、抽象的な「生命」を表すために具体的な存在であるナツメヤシが選択される。ナツメヤシは古代メソポタミアでは人々にとり貴重な食料にもなる、生活に密着した「よく知る物」だった。人間の命はナツメヤシの命に対応するものとして結びつけられる。ブ羅斯は、ナツメヤシの人間に似た「雌雄性」と「形」も、ナツメヤシが「生命の木」になった要因として挙げている(pp.233-235)が、これはつまり、この2つの類似点が、人間からナツメヤシへのアナロジーにおいて対応する点となっていることを意味する。こうして「人間」と「ナツメヤシ」は、多くの対応する点で結びつけられるしっかりとしたアナロジーの対応関係を形成するのだが、「ナツメヤシ」の常緑樹として死なない点、挿し芽による再生能力といった点で、ズレが生じる。このズレが、「永遠」の生命と「再生」する生命を強調して示すことになる。そして「再生」によって導きだされる「永遠」もまた表現され、「永遠性」は二重に表現されることになる。

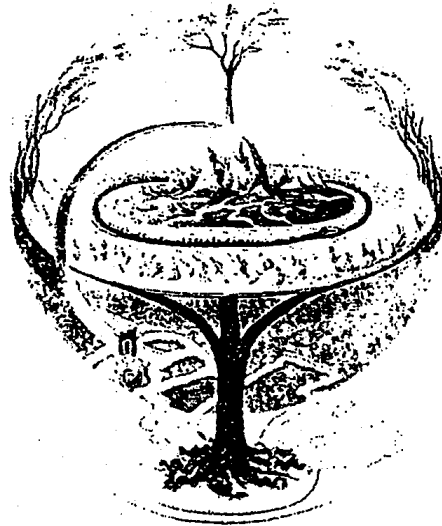
また、この図(1)にはアナロジー思考の興味深い特徴が見られる。「生命」という抽象的な事象を表すために、アナロジーの対象として、親しみあるナツメヤシの具体的な「木」のイメージが選ばれるのだが、その後、その「木」のイメージは「再生」と「永遠」という理想の「生命」をよりよく表すために現実の姿を離れて変形している。具体性故に選ばれたはずのイメージが、よりよいアナロジーのために抽象性を帯びる結果となるのである。

## 1-2. 宇宙樹

「生命の木」に並び、古代の神話において重要な役割を果たす「木」に、「宇宙樹」があるが、その中でも特によく知られているのが、北欧神話に登場する「宇宙樹ユグドラシル(=イグドラシル)」である。その姿は次の図(2)の

ように考えられた。

(2)



(コットレル, p.488)

図(2)に示した「宇宙樹」ユグドラシルにおいて、「宇宙」は、根を張りいつも青々とした枝葉を空高く広げて伸びる「常緑樹」のイメージへのアナロジーにより、理解されている。この「宇宙樹」は次の(3)のように描写されるものだが、人間の目には見えない世界の存在を感じた古代の北欧の人々は、こうした未知の世界と人間の住む世界とを結びつける物として、目に見えない地下に根を張り、天にも届きそうに高く聳え立つ木を最もふさわしいと考えたに違いない。

(3) その樅(とねりこ)というのは、あらゆる樹の中でいちばん大きく見事なものなのだ。その枝は全世界の上にひろがっていて、天の上につき出て聳えている。三つの根が樹を支えて、遠くまでのびているのだが、その一つはアース神のところ、もう一つの根は霜の巨人のところ—そこは昔奈落の口のあったところだが—、三つ目の根が、ニヴルヘイムの上にあるのだ。

(『スノリのエッダ』15)

また「宇宙樹」には、「生命の木」としての性質も含まれる。宇宙樹「ユグドラシル」の3本の根はそれぞれ異なる泉から水を吸い上げて、各界を永久に支えている。「水」の循環を示すことで、「樹液」の循環、ひいては「命」のサイクルを示すこの「木」は、「生命の木」であり、この命のサイクルが「宇宙」を支え作り上げている。

世界各地にはフレイザーの『金枝篇』に見られるように「樹木崇拜」が古くから根付いているが、「木」が崇拜されるのは、「木」が「含意し、意味するもののゆえ (p.180)」であると、エリアーデは指摘する。「木」が含意し意味するのは、無限に再生する「生命」の力であり、ひいては「世界 (=宇宙)」と言える。

- (4) 古代の宗教意識にとって、木は世界である。そして木が世界であるのは、木が世界をくりかえし、世界を「象徴する」と同時に、それを要約しているからである。 (エリアーデ, p.181)

明確な「宇宙樹」の形を取らずとも、「樹木崇拜」においては、「木」が「生命」ひいては「宇宙」と結びつくものとして捉えられている場合が多いと考えられる。

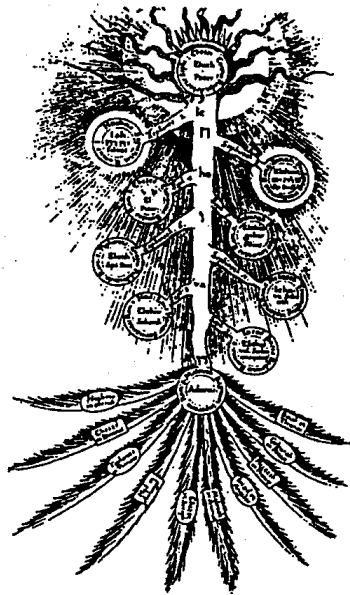
## 2. 逆さまの木

「宇宙樹」とは、「宇宙」のありようを「木」のイメージにアナロジカルにあてはめた結果に生じる、新たなイメージである。思考の出発点には具体的な「木」が存在したとしても、「宇宙」についての解釈が反映される過程で「木」は変容し、普通の「木」ではなくなっていく。

先の図(2)に挙げた北欧神話の「宇宙樹」ユグドラシルも、巨大で複雑な構造をとり、現実の木からは随分とかけ離れたものとなっているが、他の多くの神話などに残る「宇宙樹」として多く見られる「逆さまの木」も、アフリカで「樹木崇拜」の対象となっているバオバブの木を除けば、現実の木の姿とはほど遠い。「逆さまの木」とは「根を上、梢を下にした樹木の図像 (ブロス, p.91)」である。バビロニアの呪文の中に「キスカヌの木」として、インドのウパニシャッドに「アシュヴァッタの木」として登場する。キスカヌの木の枝の先は、大洋のほうまでひろがり、アシュヴァッタの木は根が上にはり、枝が下にのびている永遠の無花果樹である。ダンテの『神曲』にも「梢から生気を吸う木」“Dell' albero che vive della cima”が登場し、これも「逆さまの木」と解釈される。(エリアーデ, pp.185-190)

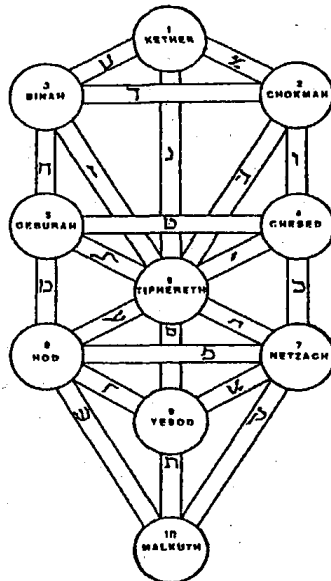
ヘブライのカバラ、ユダヤ神秘主義においては、世界の秘密を解き明かすものとして、「逆さまの木」の形をした「生命の樹」が用いられる。次に挙げる図(5)はまだ具象的だが、(6)では現実の木の形を離れ抽象的な体系図と化している。

(5)



(井上, p.38)

(6)



(Decker &amp; Dummett)

「木」が逆さまにイメージされる理由として、エリアーデはインドのアシュヴァッタの木について、「下降運動としての「創造」を、この上なく明瞭に表している。」(p.188)と論じ、ブロスユダヤ神秘主義の「生命の樹」について、「神のエネルギーのこの下界への下降」(p.92)を図解するものと論じている。「宇宙」を理解するためにアナロジー思考の対象として選ばれた「木」のイメージは、「宇宙」の真理を更に追究する思考の展開の過程で、思考をより正確に表現できる新たなイメージへと大きな変貌をとげたのである。



### 3. 聖書における「木」

聖書に登場する木には、エデンの園に神がはえさせられた「命の木」と「善悪を知る木」が特によく知られている。この2本の木は、神話に登場する「生命の木」のように、アナロジカルに「生命」や「智慧」を「木」の姿に対応させている可能性はある。上に論じた神話における「生命の木」「宇宙樹」が、「生命」と結びつき、「宇宙」の真理という「智慧」を示す物であった事実とも合致する。また、聖書の中でも「イザヤ書」には次のような箇所があり、「木」と「命」の結びつきは示唆されている。

- (7) 見よ、わたしは新しい天と、新しい地とを創造する。...  
あなたがたはわたしの創造するものにより、とこしえに楽しみ、喜びを得よ。見よ、わたしはエルサレムを造って喜びとし、その民を楽しみとする。...  
わが民の命は、木の命のようになり、わが選んだ者は、その手のわざをながく楽しむからである。 (イザヤ書,65.17-22)

しかし、「創世記」の記述では、この「命の木」と「善悪を知る木」という2本の木は具象的なままの姿しか示されない。現実世界の木と異なるのは、その実を食べると永遠の命を得るという性質と、神のような智慧を授かるという性質だけに限られる。少なくとも木の形のイメージによって「生命」や「智慧」についての考察を深めようとする姿勢は「創世記」においては感じられない。

聖書の他の箇所には、多くの「木」に関する表現が見られる。そのほとんどは明らかな比喻表現となっている。下の例では「民族」が「木」に喩えられ、その「繁栄」や「行い」が「根」や「実」に対応している。

- (8) ユダの家の、のがれて残る者は再び下に根を張り、上に実を結ぶ。  
(イザヤ書,37.32)
- (9) ヨハネは、パリサイ人やサドカイ人が大ぜいバプテスマを受けようとしてきたのを見て、彼らに言った、「... 悔改めにふさわしい実を結べ。... 斧がすでに木の根もとに置かれている。だから、良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれるのだ。  
(マタイによる福音書,3.7-10)

次に挙げる(10)の部分はやはり「民族」が「木」に喩えられるが、続く新たな章の始まりである(11)でこの「木」の比喻に新たな要素が加わる。

(10) 見よ、主、万軍の主は、恐ろしい力をもって枝を切りおろされる。たけの高いものも切り落され、そびえ立つものは低くされる。主はおのをもって茂りあう林を切られる。みごとな木の茂るレバノンも倒される。  
(イザヤ書,10.33-34)

(11) エッサイの株から一つの芽が出、その根から一つの若枝が生えて実を結び、その上に主の霊がとどまる。これは知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。  
(イザヤ書,11.1-2)

(11)の部分は次の(12)の部分と組み合わされ、「エッサイの樹」として、11世紀後期から写本の絵や教会や聖堂の壁画や天井画、柱の彫刻、ステンドグラス等に多く描かれることとなった。新たな「木」のイメージの登場である。

(12) アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図。アブラハムはイサクの父であり、イサクはヤコブの父、ヤコブはユダとその兄弟たちとの父、ユダは... オベデはエッサイの父、エッサイはダビデ王の父であった。ダビデはウリヤの妻によるソロモンの父であり、ソロモンは... マタンはヤコブの父、ヤコブはマリヤの夫ヨセフの父であった。このマリヤからキリストといわれるイエスがお生れになった。(マタイによる福音書,1.1-16)

エッサイに始まり代々続く命のつながりを表すという点では、この「エッサイの樹」は「生命の木」という性質を含みもっていると言えるだろう。しかし多くの「エッサイの樹」の図柄は、エッサイからイエス・キリストへの一直線の系統を示すことに焦点が絞られている。木の成長は(10)の内容も示しているように神が決めるものであって、木自身の生命力で決まるものではない。神の意志によりいつ倒されるやも知れぬ運命なのである。「エッサイの樹」はただ神によって生かされ、成長させられている。

こうして「エッサイの樹」は、古代の神話などの「生命の木」とは異なり、生命力や生命の神秘を表しはせず、「逆さまの木」が示したエネルギーの移動も表さない。神が造られたただ一筋の血統のつながりを示すものとなっている。下に示す図(13)の「エッサイの樹」の図案では、エッサイとイエス・キリストを結ぶ一本の線としての幹が重要な位置を占める。エッサイとイエス・キリストが太い幹で結びつけられ、他のこの家系の人物たちはその脇に配置される。フランスのシャルトル大聖堂のステンドグラスやスペインのサント・ドミンゴ・ディ・シロス修道院の回廊の彫刻などでは主要な人物が、エッサイとイエス・キリスト以外の人物も含めて一本の幹を成すように配置されるが、それもやはりあくまで、低い所に横たわるエッサイから高い所に位置するイエス・キリストへの、天にまで届くような一本の線を作るために存在するに過ぎないように見える。

(13)



エッサイの樹, 15世紀 フランドルの写本より

(『キリスト教美術シンボル事典』 p.238)

やがてはイエス・キリストの先祖となるエッサイは、一介の羊飼いに過ぎなかった。<sup>2</sup>「エッサイの樹」は、身分の低い所から高貴な所へ伸びるという点で「梯子」の図とも重なる。「梯子」は「エッサイの樹」と並び同時期に教会な

<sup>2</sup> 『聖書』サムエル記上 17. 15 に「ダビデはサウルの所から行ったりきたりして、ベツレヘムで父の羊を飼っていた。」とある。ダビデはエッサイの末の子だったことから、エッサイは羊飼いと推察される。

どで多用された図柄だった。「創世記 28.12」に登場する「ヤコブの梯子」は地の上より立ち、その頂は天に達する。地上の一般の民と天を結ぶ線を、二つの図柄はともに示している。ただ一つ大きく異なるのは、「エッサイの樹」の線にだけ「時間」という要素も含まれる点である。

アナロジーという観点から見ると、「エッサイの樹」は「木」のイメージのうち、「地上から天へと向かう方向性を持つ一本の線」という部分を利用している。「宇宙樹」に見られたような枝葉の横への大きな広がりはずぎ落とされる。また「方向性」の基準はエネルギーの移動ではなく、家系の代から代へのつながりであり、時間の推移である。ここでもやはり「木」は、アナロジー思考において、具体的な本来のよく親しまれた姿を変えられ、抽象性を帯びている。ブロスが論じるように「エッサイの樹」は後世の進化論を支えた樹形図へとつながった (p.444)。進化の樹形図へ受け継がれたのは、「時間軸」にのった「系統」関係を示す点であった。しかし、進化の樹形図が成立するにあたり欠かせなかったもう一つの重要な特徴である「枝分かれ」は、「エッサイの樹」ではまだ重要な意味を持たなかった。「エッサイの樹」は系統の広がりを示してはいない。後に進化論の登場とともに用いられた生物の進化の樹形図においては、「エッサイの樹」において刈り取られた枝葉が、再び勢いを取り戻し、「枝分かれ」することによって、「生命」に関する人類の新たな解釈を表現することになる。

## 結語

「木」のイメージを介したアナロジーの思考過程においては、興味深い現象が起きている。抽象的概念が、「木」のイメージにより具体性を獲得する一方、本来具体的で、人によく知られた姿を提供していたはずの「木」のイメージは、逆に現実の「木」を離れ、抽象性を帯びたイメージへと変形する。概念とイメージの間で、抽象性と具体性の両極から引き合うような相互作用が起きているのである。

「木」の抽象性は高まり、本来の「木」の姿は忘れられるほどになる。抽象化された「木」は、その場に応じて必要な要素だけに刈り込まれ、効果的に必要な情報を表現する。しかし、極端に抽象化されたはずの「木」も、時に本来「木」であったことを思い出すように、枝を広げ、花を咲かせ実をつける。「木」への人間が抱く親しみは、抽象化された「木」をまた再び生き返らせて、抽象的なものを身近に引き寄せせる力を失わない。こうして古代から、「木」は「生命」を始めとする多くの抽象的概念に関する思考を助け、近代から現代にかけ

ては、多くの学問分野において「樹形図」として大活躍することになるのである。

#### 参考文献

- 伊泉 龍一. 2004 『タロット大全—歴史から図像まで—』 紀伊國屋書店
- 井上 教子. 2000 『タロット解釈実践事典—大宇宙の神秘と小宇宙の密儀—』 株式会社図書刊行会
- エリアーデ, M. 1974 『エリアーデ著作集 第二巻 豊穡と再生 宗教学概論2』 久米 博訳 せりか書房
- コットレル, A. 1999 『ヴィジュアル版 世界の神話百科 ギリシャ・ローマ ケルト 北欧』 原書房
- スピーク, J. 1997 『キリスト教美術シンボル事典』 中山 理訳 大修館書店
- フレイザー, J.G. 1978 『図説 金枝篇』 東京書籍
- \_\_\_\_\_. 2003 『初版金枝篇 上』 吉川 信訳 筑摩書房
- ブロス, J. 2000 『世界樹木神話』 藤井史郎他訳 八坂書房
- Decker, R. & Dummett, M. 2002. *A History of the Occult Tarot 1870-1970*. Duckworth Pub.
- Holyoak, K. J. & Thagard, P. 1995. *Mental Leaps—Analogy in Creative Thought—*. A Bradford Book, The MIT Press.
- Sturluson, Snorri. *Edda*. ed. by A. Holtsmark & J. Helgason 1950.
- 谷口 幸男訳 1973 『エッダー—古代北欧歌謡集』 新潮社
- 『聖書』 1955 日本聖書協会